

村岡 諭 (言語学)

日本語における述語の絞込み処理と左側節境界の設定

本論文は、日本語の文処理過程において要素間の関係が確定できない状況で、解析装置が限られた情報をもとに要素間の関係を決定していく過程を、実験心理学的な手法を用いて、実証的に示したものである。

第二章では、「係り」側である名詞句が出現した時点で、解析装置は係り受け関係を構築するために「受け」側となる、ある抽象的な要素「Pred」を暫定的に挿入し、既に出てきた名詞句と Pred との間で係り受け関係を構築しているという提案がなされた。そして、どのような格助詞を持つ名詞句が入力されたかによって、どのような語彙が文末の述語として出現しうるのかを予想し、その予想の範囲を絞り込んでいくという処理を行っていることが示された。この章は、「述語の絞込み処理」について明らかにしたものである。

第三章では、複文の処理においては、主節の述語が入力される前の段階で係り受け関係を構築するためには、新しい節の始まり（これは「左側節境界」と呼ばれる）を設定する必要があることが示された。基本的には、この左側節境界は新しい節の主語となりうる名詞句が出現した時点で設定される。第四章では「全く、少しも」等の呼応副詞を含む文では、解析装置は呼応副詞の語彙的な指定に基づき述語の形式を予想することが明らかになった。この時左側節境界は、必ずしも第三章で明らかになった基本パターンに従って設定されるわけではない。この2つの章では、「左側節境界の設定」に関する議論が展開されている。

第二章から第四章までは、文中に含まれる要素について格助詞という形態的情報や、呼応関係に関する語彙的情報が取り上げられている。これらの情報は、解析装置がそれぞれの要素単独で利用することが可能な情報である。しかし、聴覚呈示された文を処理する際には、複数の要素間を通じて観察される韻律情報を利用することが可能となる。そこで、第五章では、複文構造を持つ文が聴覚呈示された場合に、韻律パターンの違いが左側節境界の設定に影響を及ぼすことが示された。第五章の結果から、アクセントの有無という各語彙に個別に指定された情報とは関係なく、主節の述語が持つ確定的な情報を利用できない段階で、解析装置は韻律情報を常に利用していることが明らかとなった。

本研究では、解析装置が文末の述語に関して絞込み処理を行い、さらにその絞込みの結果や、述語の形式に関する予想、さらに韻律情報などに基づいて左側節境界を設定する仕組みが提案されている。確定的な情報を担う主節の述語が出現していない状況であっても、解析装置は、最も基本的な単位となる節の範囲の設定を行わなければ、要素間の関係を処理することは不可能である。このように、本論文で得られた知見は、文処理において最も基本的な情報の解析過程を明らかにするものであるといえる。よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。